

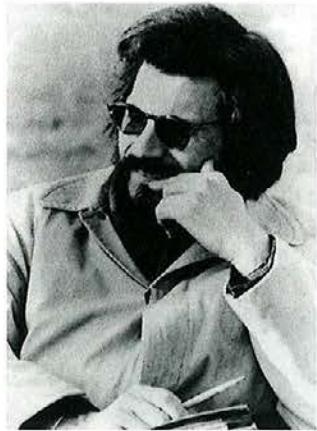
CONTENTS

- 特集・1 ピクトル・エリセ
- ピクトル・エリセの作品解説
- 特集・2 ナショナルジオグラフィック・シリーズ
- 作品紹介

IMAGE LIBRARY NEWS

● ● イメージライブラリー・ニュース 第8号 2001年6月 ● ●

イメージライブラリー・ニュースは4月・6月・9月・11月に発行の映像に関するミニ情報誌です。バックナンバーは館内でご覧になれます。

特集
ピクトル・エリセ

ピクトル・エリセは1940年スペイン・バスク地方に生まれた。エリセが少年時代を過ごしたといわれるサン・セバスチャンは、毎年国際映画祭が開催されており、エリセは1959年にこの映画祭で上映されたフランソワ・トリュフォーの『大人は判つてくれない』に衝撃を受け、映画の世界に足を踏み入れることになる。国立映画学校に入学した彼は、短編習作を制作しながら批評活動にも積極的に取り組んだ。やがて1973年、フランコ政権下の厳しい検閲制度のもと『ミツバチのささやき』を制作する。この作品は、スペイン内戦が生んだ影を色濃く映し出しているにも関わらず、図らずも、その隠喩的表現のために検閲の手は入らず、サン・セバスチャン国際映画祭においてグランプリを受賞する。エリセは非常に寡作な監督で、その後は『エル・スール』と『マルメロの陽光』の二作品を世に送りだすに留まっている。しかし、その間には実現に至らなかつたいくつかの企画があつたようである。その一つに、ベラスケスの名画『侍女たち』を題材にした『ベラスケスの鏡』があつた。シナリオもかなりのところまで書き進められたが、同様の題材を扱った作品を、同じスペインの監督ハイヌ・カミーノが撮つてしまい、実を結ぶことはなかつた。『マルメロの陽光』は1992年、カンヌ映画祭において審査員賞と国際批評家連盟賞を受賞した。



「ミツバチのささやき」



「エル・スール」

ピクトル・エリセは1940年スペイン・バスク地方に生まれた。エリセが少年時代を過ごしたといわれるサン・セバスチャンは、毎年国際映画祭が開催されており、エリセは1959年にこの映画祭で上映されたフランソワ・トリュフォーの『大人は判つてくれない』に衝撃を受け、映画の世界に足を踏み入れることになる。国立映画学校に入学した彼は、短編習作を制作しながら批評活動にも積極的に取り組んだ。やがて1973年、フランコ政権下の厳しい検閲制度のもと『ミツバチのささやき』を制作する。この作品は、スペイン内戦が生んだ影を色濃く映し出しているにも関わらず、図らずも、その隠喩的表現のために検閲の手は入らず、サン・セバスチャン国際映画祭においてグランプリを受賞する。エリセは非常に寡作な監督で、その後は『エル・スール』と『マルメロの陽光』の二作品を世に送りだすに留まっている。しかし、その間には実現に至らなかつたいくつかの企画があつたようである。その一つに、ベラスケスの名画『侍女たち』を題材にした『ベラスケスの鏡』があつた。シナリオもかなりのところまで書き進められたが、同様の題材を扱った作品を、同じスペインの監督ハイヌ・カミーノが撮つてしまい、実を結ぶことはなかつた。『マルメロの陽光』は1992年、カンヌ映画祭において審査員賞と国際批評家連盟賞を受賞した。

そうした特別の言葉で語られたこの世界には、人間の力はどうしてもなく消えていくてしまう万象

する。エリセが、変わりゆくもののイメージをとらえようとするように、『マルメロの陽光』で描かれる画家アントニオ・ロペス・ガルシアもまた、絶えずゆらぎ退廃にむかうマルメロの樹という生命を知らない手紙を書き続ける。彼らの娘のアナは、大人たちのそうした沈黙を「不在感」として認識する。『エル・スール』においても、娘のエストレリヤが父エルナンドは、蜜蜂の生態に魅せられ、その死に関する文章を綴り、母テレサは届くとも知れない手紙を書き続ける。彼らの娘のアナは、大人たちのそうした沈黙を「不在感」として認識する。『エル・スール』においても、娘のエストレリヤが父アグスティンの秘密を意識し始めるようになるのは、ぐり返し書かれた女性の名前を見つけた時であった。語ることを拒否する大人たちと同様に、沈黙につつまれたこの映画は多くを説明しない。しかし、静寂と微光に包まれた詩的表現によって、無意識の領域に語りかけ、我々観客はそこに、失われたものに対する漠然とした寂寥を感じ取る。エリセは、非常に省略された言葉で世界の神話的要素を抽出してくれるのです。

エリセの三作品に共通して描かれたのは、何かを発見するための精神的な旅の過程である。彼らが発見したものは美しい光のなかにあらわになり、夢とも現実ともつかぬイメージの中に昇華する。それは、アントニオ・ロペスが、刻々と変化する自然を前に無力であることを知つていて、それでもその流れに身をゆだねるからであろう。

エリセの三作品に共通して描かれたのは、何かを発見するための精神的な旅の過程である。彼らが発見したものは美しい光のなかにあらわになり、夢とも現実ともつかぬイメージの中に昇華する。それは、アントニオ・ロペスが、刻々と変化する自然を前に無力であることを知つていて、それでもその流れに身をゆだねるからであろう。

エリセが生まれた1940年は、スペイン内戦終了後の混乱した時代であった。共和国軍と反乱軍との3年に渡るこの内戦は、1939年、反乱軍の勝利をもつて終結した。この時から1975年に至るまでフランコ独裁体制が続き、内戦中に行われた政治犯罪に対して容赦のない弾圧が加えられた。この体制の下では、言論・出版・表現の自由は事前検閲制度の前に完全に消滅し、語ることが非常に困難であった。沈黙に満たされた社会はこの内戦における数百万の戦死者と、内戦終了間際の大量国外脱出による不在感や孤独に支配された。エリセが幼い頃に経験したであろうこの時代の死と孤独の影は、ある少女の目を通して描かれた『ミツバチのささやき』と『エル・スール』で象徴的に映し出されている。そこでは、人々は皆閉ざされ、自分が抱えている過去や心の傷を決して語ろうとはしない。彼らの秘密は、書く行為によつてのみ示される。『ミツバチのささやき』に登場する父エルナンドは、蜜蜂の生態に魅せられ、その死に関する文章を綴り、母テレサは届くとも知れない手紙を書き続ける。彼らの娘のアナは、大人たちのそうした沈黙を「不在感」として認識する。『エル・スール』においても、娘のエストレリヤが父アグスティンの秘密を意識し始めるようになるのは、ぐり返し書かれた女性の名前を見つけた時であった。語ることを拒否する大人たちと同様に、沈黙につつまれたこの映画は多くを説明しない。しかし、静寂と微光に包まれた詩的表現によって、無意識の領域に語りかけ、我々観客はそこに、失われたものに対する漠然とした寂寥を感じ取る。エリセは、非常に省略された言葉で世界の神話的要素を抽出してくれるのです。

エリセが、変わりゆくもののイメージをとらえようとするように、『マルメロの陽光』で描かれる画家アントニオ・ロペス・ガルシアもまた、絶えずゆらぎ退廃にむかうマルメロの樹という生命をとらえようと、マルメロの樹と時間を共有する。アントニオの描く絵画にはそこに流れる時間が蓄積されてゆき、エリセはその一連の過程を、時間の運動をとらえるカメラによって見つめ続ける。『マルメロの陽光』には、こうした二重の視線と時間のからぐりが存在している。時間軸という点において決定的な差異が生まれる絵画と映画が、『マルメロの陽光』において、これほどまでに接近しているのは、アントニオ・ロペスが、刻々と変化する自然を前に無力であることを知つていて、それでもその流れに身をゆだねるからであろう。

(文 構成/田中 友紀子)

第14回講座にてピクトル・エリセの作品を上映・解説いたします。詳しくは、ポスター・チラシをご覧下さい。

講師・藤野 健／橋本 梁司

ミツバチの巣さやき 1973年 99分

EL ESPIRITU DE LA COLMENA



■あらすじ■1940年頃のスペイン・カステイーリャ地方。巡回映画で『フランケンシュタイン』を見た6歳の少女アナは、姉イサベルに、なぜ怪物は女の子を殺し、自分も殺されてしまうのか尋ねる。イサベルは思いつきで、怪物は実は精霊で、身体を持っていないから殺されることはなく、村はずれの一軒家に隠れているのだと嘘をつく。それを信じ、アナは学校帰りに一人でその廃屋を訪れるようになる。ある日、そこで負傷した逃亡者に出会ったアナは、男にリンゴを与え、父の外套を渡し介抱する。しかし逃亡者は射殺され、そのショックからアナは病んでしまう。



アナの住む家には蜂の巣形の格子が施されたガラス窓があり、はちみつ色の柔らかな光がたたえられている。詩人モーリス・メーテルリンクのように、私たちはその巣をこじあけて、蜜蜂の如く寡黙な住民の、精神や神秘を垣間見ることができる。映画の原題である『ミツバチの巣の精神（精霊）』とは、メーテルリンクの観察記『蜜蜂の生活』からの引用である。父フェルナンドが夜の書斎で朗読するのもその一節であり、実はこの人物像のモチーフが姉イサベル本人なのだ。

エリセが姉イサベルの企みをもつて、〈怪物〉と〈精霊〉との巧みな替え作業を行ったのには確固たる意志を感じられる。映画『フランケンシュタイン』の引用ながら、メーテルリンクのこの著書は映画の中核をなしているのだ。

メーテルリンクは神秘的な蜜蜂の生態の中に、彼らを支配統率しているなんらかの意図や用心深さを持つた〈巣の精神〉にようとしていた。その一例として分封（巣別れ）のシステムが叙述されている。それは、蜜や花粉に満たされた安住の住処を持っているにも関わらず、好機を逃さない抜け目ない〈巣の精神〉に導かれ、ある日女王蜂がそれを新女王に明け渡し、新しい巣づくりのために旅立つというものだ。それは少女アナの冒険譚と何と似ていることだろう。彼女は〈怪物＝精霊〉の存在を求める過程で死を学び、自らが従属してきたもの、父・母・姉から旅立つてゆくのだ。

■あらすじ■エストレリヤは振り子を使つて水脈を探し当てるという不思議な力を持つていた。振り子は父娘に奇蹟を共有させ、二人を強く結び付けていた。ところが成長したエストレリヤは、父の心が母にではなくイレーネ・リオスという女優にありことに気が付く始める。かつてのように父が振り子を使つて奇蹟を起こすことはなくなり、父娘の間には埋めようのない溝がでていた。ある朝父が失踪する。枕元に振り子が残される。イサベルは思いつきで、怪物は実は精霊で、身体を持つていないから殺されることがなく、村はずれの一軒家に隠れているのだと思いつく。それを信じ、アナは学校

■あらすじ■エストレリヤの父アグスティンは振り子を使つて水脈を探し当てるという不思議な力を持つていた。振り子は父娘に奇蹟を共有させ、二人を強く結び付けていた。ところが成長したエストレリヤは、父の心が母にではなくイレーネ・リオスという女優にありことに気が付く始める。かつてのように父が振り子を使つて奇蹟を起こすことはなくなり、父娘の間には埋めようのない溝がでていた。ある朝父が失踪する。枕元に振り子が残される。イサベルは思いつきで、怪物は実は精霊で、身体を持つていないから殺されることがなく、村はずれの一軒家に隠れているのだと思いつく。それを信じ、アナは学校

■あらすじ■エストレリヤの父アグスティンは振り子を使つて水脈を探し当てるという不思議な力を持つていた。振り子は父娘に奇蹟を共有させ、二人を強く結び付けていた。ところが成長したエストレリヤは、父の心が母にではなくイレーネ・リオスという女優にありことに気が付く始める。かつてのように父が振り子を使つて奇蹟を起こすことはなくなり、父娘の間には埋めようのない溝がでていた。ある朝父が失踪する。枕元に振り子が残される。イサベルは思いつきで、怪物は実は精霊で、身体を持ついないから殺されることがなく、村はずれの一軒家に隠れているのだと思いつく。それを信じ、アナは学校

エル・スール 1983年 95分

EL SUR

マルメロの陽光 1992年 139分

ELSOL DEL MEMBRILLO

参考文献・出典

- E/Mブックス③ピクトル・エリセ エスクアアマガジンジャパン
- ピクトル・エリセ LDボックス 作品解説書 バイオニアLDC
- 季刊リュミエール創刊第1号 築摩書房
- イメージフォーラム NO.140 ダゲレオ出版
- ユリイカ 1985年3月号 青土社
- キネマ旬報 1993年4月上旬号 キネマ旬報社
- カイエ・デュ・シネマ・ジャポンN.7 フィルムアート社
- 芸術新潮 1993年5月号 新潮社
- エスクアアマガジン日本版 1993年5月号 株式会社UPU
- マリ・クレール 1993年5月号 中央公論社
- 蜜蜂の生活 M・メーテルリンク著 工作舎



■あらすじ■画布を脇に抱えた画家が通りを歩いてくる。アトリエに入つて画具の準備を済ませると、彼は庭のマルメロの木の前に立つ。マルメロを描く彼のもとには様々な人々がやって来る。妻や娘、友人、家の改修工事をする外国人労働者たち。彼らは画家の制作風景を見て、感心したり、あきれたりする。時には画家に指図され、大事なマルメロの木に覆いを被せてやつたり、邪魔な葉を棒でほんの少し持ち上げるといった小細工をする。けれど彼らはやがて去っていく。傍らのラジオが湾岸戦争の戦況を伝える。でも彼は、絵を描く使命に生かされた、マルメロの庭の唯一の人間のように世界から閉ざされているのだ。画家の試みが達成されることのないままマルメロが地面に実を落とすと、彼はようやく描くことを止め、眠りにつく。彼が夢見るのは、両親と過ごした生家から見える、懐かしいマルメロの木立だ。

画家アントニオ・ロペス・ガルシアがマルメロの木を描く試みと、彼が見たという夢のイメージ、ドキュメンタリーとフィクションが丹念に織り込まれた作品だ。

画家とマルメロの間に何かを捉えようとやきもきするエリセの緊張感は、映画が進むにつれ払拭される。前半の贅沢なカット割りや移動撮影が嘘のよう、カメラはやがて、最善のショットを得るにふさわしい、しかし位置にたたずんで、「演出はしないが、そうなるよう仕向けて」とエリセが言い訳をする画家と訪問者たちのやりとりを、静かに受け入れていく。この作品には、画家の試練と同様に、エリセ自身のデッサンの筆跡が生々しく残されている。

■あらすじ■画布を脇に抱えた画家が通りを歩いてくる。アトリエに入つて画具の準備を済ませると、彼は庭のマルメロの木の前に立つ。マルメロを描く彼のもとには様々な人々がやって来る。妻や娘、友人、家の改修工事をする外国人労働者たち。彼らは画家の制作風景を見て、感心したり、あきれたりする。時には画家に指図され、大事なマルメロの木に覆いを被せてやつたり、邪魔な葉を棒でほんの少し持ち上げるといった小細工をする。けれど彼らはやがて去っていく。傍らのラジオが湾岸戦争の戦況を伝える。でも彼は、絵を描く使命に生かされた、マルメロの庭の唯一の人間のように世界から閉ざされているのだ。画家の試みが達成されることのないままマルメロが地面に実を落とすと、彼はようやく描くことを止め、眠りにつく。彼が夢見るのは、両親と過ごした生家から見える、懐かしいマルメロの木立だ。



ナショナルジオグラフィック・シリーズ

-イメージライブラリー所蔵作品より- 文・構成 狩野志歩

イメージライブラリーには現在、83タイトルのナショナルジオグラフィック・シリーズがある。ひときわ目を引く印象的な黄色いパッケージ。この「ブライトリーナイエロー」(輝く黄色)と呼ばれる黄色を雜誌で親しんでいる人も多いかもしれない。

これらのドキュメンタリーパン組を制作しているのは、100年以上の歴史を持つ、アメリカに本部を置く世界最大の非営利団体であり、科学・地理学の『ナショナルジオグラフィック』誌で有名なナショナルジオグラフィック協会である。

「地理知識の普及と探究」を目指して、ナショナルジオグラフィック協会が雑誌と共に発足したのは、19世紀末の1888年であった。ナショナルジオグラフィック誌の創刊当初は、地理学を掲げていることもあって、学術論文を中心で読者層も限られていたようだ。しかし、第2代会長で電話機の発明家でもあるグラハム・ベルが関わるようになってから、ナショナルジオグラフィック誌は一般的に親しみ易い雑誌に生まれ変わった。

19世紀は産業革命の起こった時期である。印刷技術の発達によって、大量で迅速な複製が可能となり、次々と新聞や雑誌が創刊された。これまでの狭い範囲でのコミュニケーションから、不特定多数の大衆に向けて、即座に情報を発信できるようになったのである。また、テクノロジーの急速な発展と共に、時代の高揚感の中、人々はあらゆる可能性に期待し、世界の全てを知りたいという欲求に駆られた。

そうした期待に応えるように、多くの探検家たちが前人未到の地へ赴いていった。ある者は北極点を目指し、ある者は謎に包まれたアフリカ大陸を歩き、またある者は失われた古代文明の遺跡を求めて。ナショナルジオグラフィック誌はそんな探検家たち自らの手記を載せて読者の心をとらえた。加えて写真印刷の技術の向上により、人々は今まで想像もしなかった未知の光景と出会うことになったのである。この頃から、ナショナルジオグラフィック誌は雑誌としては初めての、写真を中心としたビジュアル誌に移行していった。単なる挿し絵にすぎなかった写真が、それ自体で雄弁に語ることを証明したのである。カメラを携えた探

検家たちから、次第にカメラマン自身が未知の冒険へと旅立つようになっていた。また、19世紀末に生まれた映画技術によって、写真よりも臨場感溢れる記録ができ、1920年代には深海や高山などの過酷な条件下で撮影、時にはその場で現像しながら旅を続ける者もいた。

そして、20世紀の半ば頃には地球上に未踏の地はほとんどなくなってしまった。探検家は貴族から研究者へと代わり、未知の世界の探究は調査と呼ばれ、それは自然、歴史、科学など、地球上の様々な未知の事象に及んだ。ナショナルジオグラフィック協会は、こうした研究・調査の支援活動も行なうようになった。協会による最初の助成は、インカ帝国の都市マチュピチの遺跡発掘(1911年)で、他にもアポロ11号による人類初の月面着陸、タイタニック号の発見など、これまでに約6500もの調査・探検を支援してきた。

「人間との関わりという視点から未知の世界を分かりやすく伝えたい」というベルの言葉を今なお忠実に受け継ぐ協会にとって、映像は重要な情報伝達手段である。ナショナルジオグラフィック協会が記念すべき第1回TVスペシャルの撮影に選んだのは、1953年に人類が初めて登頂に成功した世界最高峰の山、エベレストであった。1963年、アメリカ隊の登頂に同行したカメラマンたちは、零下30℃の中、凍傷で指を失いながらも山頂に到達。そこで撮影されたフィルムがリビングのテレビの前にいるアメリカの人々に届けられたのである。

以来、協会は30年以上に渡ってドキュメンタリーパン組を制作し続けてきた。一つの番組のために2~3年もの歳月をかけ、根気強く徹底した取材で制作された作品は、テレビ界のアカデミー賞といわれるエミー賞を含めて今までに400以上の賞を受賞している。

ナショナルジオグラフィック協会が100年以上にも渡って守り続けてきたことは、探検家自らの手記を載せたり、写真や映像を用いることによって、彼等が体験した眼差しをそのまま人々に伝えてきたことである。特に写真や映画技術が発明された当初から、「見ることは信じること」と唱え、映像の持つ力を見抜いていたことは意義深い。

ナショナルジオグラフィック・シリーズが扱うテーマは様々だが、誰にでもわかり易いように努力している真摯な態度は共通している。こうした歴史や理念を知った上で、是非一度このシリーズを鑑賞してみてもらいたい。

NATIONAL
GEOGRAPHIC
TELEVISION■第2代会長グラハム・ベル
(1847~1922)

電話を発明したことで世界的に有名になったベルは、好奇心旺盛で何にでも果敢にチャレンジする冒険家でもあった。



■創刊号は1888年10月に刊行された。おなじみの黄色い表紙になったのは1896年になってから。



■アフリカの野生動物(1906)

夜の間にまぎれる野生動物たちをフラッシュでとらえたこの写真を人々は驚異の目で見つめた。

当時、アフリカは暗黒大陸と呼ばれ、アメリカの人々がその姿を目にするとはほとんどなかった。

■ロバート・ピアリー

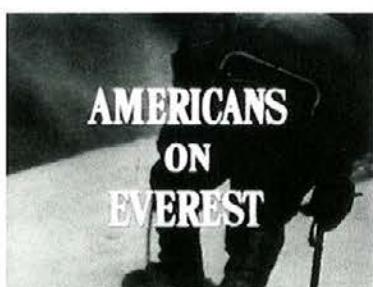
北極点到達に初めて成功した彼の手記がナショナルジオグラフィック誌に掲載され話題となり、同誌はもとより彼自身も名声を勝ち取ることができた。



ナショナルジオグラフィック協会が支援した調査



■アポロ11号による人類初の月面着陸(1969年)

■タイタニック号の発見(1985-86年)
1912年に沈没したこの豪華客船が74年ぶりに姿を現した時、伝えられてきたことにいくつかの矛盾があったことが分かった。■エベレスト登頂の記録フィルム「AMERICANS ON EVEREST」(ナレーション:オーソン・ウェルズ)
世界最高峰(8,848m)を誇るエベレストは、探検家たちにとって最後の秘境であった。

「さすらいの二人」

伊・仏・スペイン合作 1974年 118分
監督／ミケランジェロ・アントニオーニ
出演／ジャック・ニコルソン
マリア・シュナイダー 他

あらためて数年前に観たこの映画を観る。何かが圧倒的で心の奥底に静かに眠っていた映像。でもこの映画、なにやら謎だらけだったような。

記者デビット・ロックがテレビの取材でアフリカの砂漠を彷徨する中、ふとしたことからホテル隣室の男ロバートソンに成り変わる(?)。その後、彼は旅行中の女子学生に出会い、次々と起こる事件に共に翻弄される(?)。一方、記者の妻はロック死亡の知らせを受けるが、夫が生きていると確信し、捜索に旅立つ。しかし、見つけ当たった夫の姿を見、「この男は知らない」と呟く(?)。そして、謎は謎のまま映画は閉幕の優しい曲を奏ではじめる。

こんな風に登場人物たちの行動のみを並べると、謎を一つずつ解説しながら観るミステリー映画のようである。だが、実際はあまりにも焦点の定まらないストーリー展開、あまりにも無味乾燥な映像は「ただの謎解き映画」にしては無駄だらけである。それでも、閉幕の音楽を聴くころには、なにやらぐっと胸にくるものがあるから不思議だ。そのわけがこの紙面では必要か?

解けていない謎が、人間のディスコミュニケーションを象徴していたり、物事の不条理を暗喩的に表していたりと、この映画を意味深長にしている。だが、もっと単純で圧倒的原因のだ。それは、物語の持つ極端な匿名性。記者は記者の振るまいを、政治家は政治家の語りを、テロリストはテロリストの行動を寡黙にこなし、まるでその人物たちが砂漠や現代建築の一部分であるかのような在り方。人間同士のやりとりまでもを建築物に当たる光の変化を追うのと同じレベルで捉え、まるごとひとつの絵にしてしまう方法。そして、その形式自体が匿名化された人物の「心」を体現しているという逆説。

圧倒的な風景画を前にぼんやりとしていると、ふと登場人物たちの謎の言動が蘇ってくる。その解答を追い求めようと風景の中へ歩みを進めると、この映画はある象徴の色味を帯びて完成し始めるだろう。

(共通彫塑研究室・助手 丹羽陽太郎)



編集委員 板屋 緑一 映像学科 教授
下川久美香 犬野 志歩
木村美佐子 田中友紀子

イメージライブラリー・ニュース 第8号 2001年6月発行

武蔵野美術大学 イメージライブラリー
〒187-8505 東京都小平市小川町1-736
TEL/FAX 042-342-6072
禁無断複製・転載



作品紹介

シンデレラ将軍

「ベンヤメンタ学院」

イギリス 1995年 105分
監督／プラザーズ・クエイ
出演／アリス・クーリジ
マーク・ライランス 他

ヤーコブが学院の玄関ベルを鳴らすとドアのぞき穴から猿が顔をのぞかせる。ヤーコブはこの猿に向かって話し始める。「この学院に入学したいんです。」このベンヤメンタ学院は校長と女教師の二人で経営する召使の養成学院。ここに入学したヤーコブは、毎日のように繰り返されるまったく同じ授業(?)を受けながら次第に学院内の秘密に魅かれていく。

監督によると、この学院はもともと牡鹿から取れる香水「ムスク」の製造工場で、この工場を校長が買い取ったという設定になっている。ムスクの香り(=鹿の亡靈)に取り憑かれているかのような校長が学生を鹿に見立てるシーンが出て来るのはこの事に関係している。ストーリーと映像が幅広化した関係で成り立っているので、こんな裏話も知っておくと映像に対する興味も搔き立てられる。

この映画は双子の人形アニメーション作家(元デザイナー)が撮った実写版。多様なイメージの集合体のような構成にもかかわらず、この双子の監督は一貫性のあるイメージを創りだしている。彼らは映像の鍊金術師と呼ばれるほど、巧みに実験的なカメラワークをする。特殊なカメラレンズを使い、映像を劇的に膨張させ、細部を際立たせ、空気中の湿度さえ操っているように撮影する。モチーフは一度乾燥させた廃品や自然物を使う。幻想的な映像イメージはこのように創り出されている。しかし、物語の筋立てについてはまったくと言って良いほど描写しない。雰囲気は分かりやすいが、具体的な場面設定や内容は分かりにくい。観る側が場面や内容を想像しながら観る、これがこの映画の特徴、面白さではないだろうか。

原作はカフカが尊敬したローベルト・ヴァルザーの「ヤーコブ・フォン・グルテン」(集英社から1979年に世界文学全集第74巻で出版されているが、現在は品切れ)だが、所々に「シンデレラ」や「白雪姫」も織込まれている。

この作品を観てクエイ兄弟に興味を持った方はぜひ「ストリート・オブ・クロコダイル」と「プラザーズ・クエイの短編集」も観て、アニメーションと実写の比較などをして欲しい。私は人間と人形を同じまなざしで捉えたクエイの視線に驚愕した。

(基礎デザイン学科研究室・助手 中村恵夏)